

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

3. 「神」の現在
 - 3-1：聖書の神と形而上学的神
 - 3-2：強き神と弱き神、その彼方へ
4. 聖書から経済・政治・社会
 - 4-1：聖書学と社会学 11/11
 - 4-2：聖書学から社会教説へ 11/18
5. キリスト教と経済学説
 - 5-1：ウェーバー・テーゼをめぐって 12/9
 - 5-2：近代経済学と神学——アダム・スミス (12/16)
 - 5-3：キリスト教・資本主義・社会主義 (12/28)
6. キリスト教と政治理論
 - 6-1：現代思想のパウロ論 (1/6)
 - 6-2：イデオロギーとユートピア1 1/13
 - 6-3：イデオロギーとユートピア2 1/20

<前回>

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境**3. 「神」の現在****3-1：聖書の神と形而上学的神****1. キリスト教と神観念の複合性****(1) 絶対的なものとしての神**

1. 「絶対的なもの」、神の絶対性とは何か。全能性、最高存在・最高価値？
→ 形而上学的な神
2. 形而上学批判を基調としたポストモダンの思想状況において、伝統的な神の絶対性は問い直しが求まれている。聖書的な宗教に適切な神概念とは何か。

(2) ヘブライズムとヘレニズム

3. キリスト教的伝統を構成する複合性への意識：
聖書の宗教とギリシャ思想の相違、ギリシャ的形而上学とその神概念からの差異の意識。近代における、ギリシャ的近代的伝統との差異化におけるユダヤ的キリスト教的伝統の再発見
4. マュー・アーノルドにおける、「ヘブライズム」(Hebraism)と「ヘレニズム」(Hellenism)の類型論

(3) キリスト教神学の形成過程

2. 聖書の神と形而上学的神との緊張関係

(4) ハヤ・オントロギア

(5) 聖書の宗教と存在論的思惟

10. ティリッヒ『聖書の宗教と究極的実在の探究』
11. 聖書の思惟とギリシヤ的哲学的思惟（存在論）との差異性あるいは緊張関係→「両者が究極的な一致と深い相互依存性を有している」（357）
12. 19世紀の宗教批判 → カール・バルト
13. バルト主義者：「聖書の宗教」ではなく、「聖書の啓示」と言うべきである。
14. 人間存在としての可能性としての宗教。人間的生の精神的次元における自己超越性としての宗教（前回の講義）。

ティリッヒ：啓示は人間によって受容されて初めて「啓示」となるのであり、啓示には人間の側の受容——まさにこの受容こそが「啓示の器」としての「宗教」にほかならない——が不可欠である。

↓

聖書は神の啓示の書であるのみならず、同時にその啓示を受容した人間による「自分の宗教についての報告」である。

正典としての聖書という伝統的理解の再解釈。聖書は無謬か？ 正典とは？

客観化、固定化、実体化の問題性。「ある」から「なる」へ。

15. 存在論：広義（人間に固有の思考法としての）と狭義（古代ギリシヤの）
 - ・「存在するものの諸領域における存在の現前とその諸構造」を示そうとする「存在論的な分析」（360）。
 - ・「なぜこれはこのようであって、あのようではないのか」「なぜ私は存在するのか」といった問いを組織的に考え抜く努力としての哲学（存在論）から人間は逃れるはできない。「人間は問う存在者」、「有限性の中で存在を問う存在者」である（361）。

(6) 聖書の人格主義

16. 聖書の「人格主義」(personalism) :
 - ・「人格」とは、「自己自身と、また世界とに関係づけられ、またそれゆえに、理性、自由、そして責任を伴う」、「人間的領域での個別性」（366）を意味する。いわゆる「我一汝」関係。
 - ・あらゆる宗教において、聖なるものは人格的な存在として経験される。cf. 波多野精一
17. 人格主義：神を個別性において、つまり、「一存在者」としての経験する。

存在論的な神概念：「存在自体(Being-itself)は、存在する一切のものに現前し、一切のものは存在に参与」（368）しているものであり、それは個々の存在者の個別性を超越して働く「存在の力」である。

↓

この存在論的な問いにおいて、人格的神の個別性は超越されることになる。「存在論は一般化し、聖書の宗教は個別化する」（371）。

19. 神と人間の人格的關係は、自由な相互性に基づく。
20. 聖書的な人格の相互性は、存在論的神観念（形而上学的な神）に矛盾？
自由な相互關係が時間、空間、因果律、実体といったカテゴリー内部で成立するのに対

S. Ashina

して、存在自体はこれらのカテゴリーを超越しているからである。

21. 言葉：「人格と人格との関係性は言葉を通して現実となる」（*ibid.*）。啓示は言葉による神の語りかけであり、人間は聴くように求められる。
しかし、「存在論は別のカテゴリーで考える」（369）。
22. 聖書の宗教と存在論的思惟との相違と対立。しかし、聖書の宗教も存在論的問いを免れることはできない。
・「あらゆる真の祈りにおいて、神はわれわれの祈る相手であると同時に、われわれを通して祈る者である。なぜなら、神の霊こそが正しい祈りをつくり出すからである」（387）。
24. 聖書の宗教と古代ギリシアの形而上学的思惟：
相互の決定的相違にもかかわらず、いわば強い神とでも言うべき神概念の成立に共に寄与し、また聖書の宗教の神は「弱き神」でもある。
ポストモダンの形而上学批判がキリスト教思想によって有する意味の複雑さ。

3. 神の絶対性と形而上学批判

(7) 宇宙論的で強い神

25. 聖書の宗教と古代ギリシアの哲学的思惟：両者が宇宙論という枠組み共有→強い神とでも言うべき神概念の成立に共に寄与。
26. 聖書の神における神の聖性
ルドルフ・オットー『聖なるもの』：ヌミノーズの経験。ヌミノーズが心情内に喚起する感情反応は、「戦慄すべき秘義」と「魅する秘義」の両極構造（二重内容）を特徴としている。イザヤ書六章のセラピムの歌。
→ 聖書の神は、畏怖し魅惑する強烈な力の神、つまり「強い神」の典型。
オットー『聖なるもの』山谷省吾訳、岩波文庫、一九六八年、二三頁。（Rudolf Otto, *Das Heilige. Über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen*, C.H.Beck, 1987(1917).)
27. この神経験が合理化：怒りと愛という図式の成立
図式化＝合理化が聖書自体の内部で始まっており、聖書の神は、威力（しばしば非合理的な暴走する力となる）と知恵（「主を畏れることは知恵の初め」）の両極性を有しており、「強い神」も外見ほど単純ではない。
・ C.G.Jung, *Antwort auf Hiob*(1952), Deutscher Taschenbuch Verlag, 1990.（ユング『ヨブへの答え』林道義訳、みすず書房、一九八八年。）cf. ジジエク『操り人形と小人』のヨブ論。
28. 強い神のキリスト教思想における展開。
キリスト教は、古代思想の共通問題であった悪の起源という思想的文脈において、「無からの創造」論を構築し、宗教改革期においては、神の独占的活動性、そして二重予定説を生み出す。
29. アリストテレス：自然学における運動論→『形而上学』の「不動の動者」
↓
「神の不可受苦性」の思想：一切からの影響作用を超えて超然としている神
cf. 熱情の神あるいは妬む神
30. 「強い神」：自己完結的で全包括的な神は絶対的な威力を有する支配する神。

最高存在・最高価値としての神。最上級の神。

(8) ハイデッガーの形而上学批判

31. 近代の宗教批判の系譜：フォイエエルバッハからマルクス、フロイトへ、そしてニーチェからハイデッガー、ポストモダンへ。

・啓蒙的合理性の立場からの形而上学批判

・啓蒙的理性とキリスト教的伝統からなる西洋世界 (Abendland) 総体に対する批判

32. ハイデッガー：形而上学へ正面から取り組んだ——形而上学の根拠からその克服へ——。『形而上学とは何か』(Was ist Metaphysik?)の「序論」

33. 形而上学：「存在の真理は形而上学にとっては隠されている」(ibid., 11)。＝「存在するものと存在との混同」「存在忘却」(Seinsvergessenheit) (ibid., 12)

↓

形而上学は、存在するものの存在性 (Seiendheit) を二重の仕方で表象する。

・存在するものの全体を、その最も普遍的な特徴の意味において (存在論)。

・最高の従って神的なものの意味において (神論)。

＝形而上学的思惟 (狭義の存在論であるとともに神論) の「存在—神論」(Onto-Theo-Logie)の本質。

34. キリスト教的西洋世界において、ヘレニズムとヘブライズムが緊張関係は単なる偶然ではない。存在の「性起」(Ereignis)、「存在の命運」(Seinsgeschick)として生起した。

今や、ニーチェと共に、古代ギリシャを第一の元初 (erste Anfang) する形而上学的エポックは夕暮れにさしかかり、存在の命運は第二の、別の元初への。

(9) キリスト教思想と形而上学再考

35. 近代以降の宗教批判は、キリスト教思想に伝統的な神理解の再考を迫るものとなった。とくに、ニーチェとハイデッガーに依拠しつつ展開されているポストモダンの形而上学批判は、キリスト教思想の脱形而上学化を促しつつある。しかし、ポストモダンが二十一世紀のキリスト教思想にとっていかなる意味を有するのか、また形而上学はあらゆる意味で終焉を迎えたのかは、決して自明ではない。むしろ、キリスト教思想においては、現在、脱形而上学的思惟と形而上学批判以後の形而上学再考の試み (たとえば、パネンベルクやプロセス神学) とが交錯していると評すべきであろう。

36. ポストモダンの形而上学批判にもかかわらず、形而上学があらゆる意味で終焉を迎えたかは、決して自明ではない。むしろ、キリスト教思想においては、現在、脱形而上学的思惟と形而上学批判以後の形而上学再考の試み (たとえば、パネンベルクやプロセス神学) とが交錯していると評すべきであろう。錯綜した問題状況については、以下の拙論を参照。

芦名定道「キリスト教思想と形而上学の問題」『基督教学研究』(京都大学基督教学会) 第二四号、二〇〇四年、一一二三頁、「ホワイトヘッドの形而上学とプロセス神学」『基督教学研究』(京都大学基督教学会) 第二五号、二〇〇五年、二一一—四一頁、「現代キリスト教思想と宗教批判——合理性の問題を中心に」『宗教研究』(日本宗教学会)、三五七号、二〇〇八年、掲載予定。

3. 「神」の現在

3-2 : 強き神と弱き神、その彼方へ

(1) 「弱き神」の系譜

1. 近代以降の宗教批判：キリスト教思想における伝統的な神理解に再考
ニーチェとハイデガーに依拠しつつ展開されているポストモダンの形而上学批判→キリスト教思想の脱形而上学化
2. 「弱き神」の系譜：ハイデガーからジャンニ・ヴァッティモやジョン・カプート
3. 小野真は『ハイデッガー研究——死と言葉の思索』（京都大学学術出版会、二〇〇二年、二四四頁注五）。
「ハイデッガーの「形而上学」構想における神性観においては、『宇宙における人間の地位』においてマック・シェーラーが示した、「人間の共働なしには自体的に存在者はその規定に達することができない」、という神性観への共感が潜んでいる。ハイデッガーの言葉でいえば、人間自身が「神の共働者」となる「弱き神の観念」による触発によって、ハイデッガーの聖なるものの思索が表面化しているといえる。」
4. 「わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます」（第二コリント六章一節。引用は、『聖書 新共同訳』日本聖書協会による）。
5. ヴァッティモとカプート：解釈学的哲学の系譜
John D. Caputo, *The Weakness of God. A Theology of the Event*, Indiana University Press, 2006.
ジャンニ・ヴァッティモ『哲学者の使命と責任』上村 忠男訳、法政大学出版局。
Gianni Vattimo, "The Age of Interpretation," in: Richard Rorty, Gianni Vattimo, *The Future of Religion* (ed. Santiago Zabala), Columbia University Press, 2005, pp.43-54.
Gianni Vattimo, "Towards a Nonreligious Christianity," in: *After the Death of God* (ed. by Jeffrey W. Robbins), Columbia University Press, 2007, pp.27-46.
6. 「解釈の時代」（ローティとの共著『宗教の未来』に収録）
 - ・ニーチェとハイデガーの系譜に位置付けつつ、「解釈学の哲学的真理、すなわち、他の諸哲学よりも〈妥当〉であるとのその主張」から議論を開始。
 - ・「解釈学とキリスト教との関連づけ」（Vattimo、2005、47）、「我々のキリスト教的歴史性」（our christian historicity）の自覚。クローチェの「我々は自身をキリスト教徒と呼ばざるを得ない」という言葉を文字通りの意味で受け取り、「我々」が——この「我々」はさしあたり西欧世界に限定されている——、「キリストの宣教によって開かれた伝統の外に自らを置くことができないことを発見する」（ibid., 54）こと。
 - ・「弱い思想」としての解釈学。解釈学的思惟は、あらゆる権威主義と絶対主義のなかで作用している形而上学的な真理の絶対性主張を断念し伝統に拘束された主体の継続的変容過程を承認する点で「弱い」思想であり、さらに、形而上学的思惟の諸前提を解体し主体を自由にする点で「弱くさせるもの」である——ニーチェのニヒリズムの意味における解釈とは解放にほかならない——。
 - ・「キリスト教を非宗教的に解釈すること」。
7. 「こうしておそらく、真のキリスト教は非宗教的でなければならないのである。キリスト教においては、自由への根本的な関与が存在している。そして、少々スキャンダルめいたことになるが、このことは、自由を支持することによって、真理（という観念）からの自由を含んでいるのである。結局、客観的真理なるものが実際にあるとするならば、

そこにはつねに私よりもそれをより多く所有する人が存在しており、それによって、義務づける法をわたしに課するように権威づけられることになるだろう。(Vattimo, 2007, 37)

8. このニヒリズム（そして世俗化）のプロセスを限界づけるものが「愛」であり、キリスト教は自由への歴史的動向の推進力であるとともにその限界という役割を担う。

9. 弱き神への共鳴は、キリスト教思想自体の内部に確認できる。

「ケノーシス」論（フィリピ二章六一八節）。

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」

・キリストのケノーシス：「自分を無にして」「僕の身分」「十字架の死」「従順」。

10. モルトマン：「十字架につけられた神」の神学的意義を論じ、カバラの「神の収縮」の議論の神学的意義を強調。

Jürgen Moltmann, *Der gekreuzigte Gott*, Chr.Kaiser, 1972, (モルトマン『十字架につけられた神』新教出版社、1976年。) *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre*, Chr.Kaiser, 1985. (『創造における神——生態論的創造論』新教出版社、1991年。)

11. 波多野精一『宗教哲学』の構想：「力」の神からイデアリズム（「真」の神）を経て「愛」の神の人格主義へと展開する。

遠藤周作：母なるもの、神の無力さ・沈黙。

12. 北森嘉蔵『神の痛みの神学』新教出版社、一九四六年（講談社、一九八一年）。

芦名定道「日本の宗教哲学とその諸問題——波多野、有賀、北森」、現代キリスト教思想研究会『アジア・キリスト教・多元性』第9号、2011年、pp.89-111。

13. 聖書の神とは、「御自身の痛みをもって我々人間の痛みを解決した給う神」であり、「痛みにおける神」とであると主張する。神の痛みとは、神の怒りと愛に対するいわば第三のものであり、神が本来包むべからざるもの（罪人）を包むところに生まれる。これは、古典的の三一論において形而上学的概念によって定式化された強い神を、聖書の宗教（預言者エレミアとイザヤ、そして十字架の出来事）によって克服する試みである。

14. 「パウロと政治」という舞台上で展開される政治哲学の議論。

使徒パウロをめぐるのは、聖書学や神学はもちろんのこと、それを超えて、政治思想の連関での議論が顕著な動向となりつつある（イエス・ルネサンスからパウロ・ルネサンスへ）。

15. タウベス『パウロの政治神学』岩波書店 (Jacob Taubes, *Die politische Theologie des Paulus*, Wilhelm Fink Verlag, 1993.)、アラン・バディウ『聖パウロ——普遍主義の基礎』河出書房新社 (Alain Badiou, *Saint Paul. La fondation de l'universalisme*, Presses Universitaires de France, 1997)、アガンベン『残りの時——パウロ講義』岩波書店

(Giorgio Agamben, *Il tempo che resta. Un commento alla Lettera ai Romani*, Bollati Boringhieri, 2000.)、宮田光雄『国家と宗教——ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』岩波書店、2010年。また、現代聖書学（特にアメリカ）における「パウロと政治」をめぐる動向については、宮田光雄（2010、7,11-13）のほか、栗林輝夫「現代帝国論とイエス／パウロ」（日本基督教学会『日本の神学』50、2010年、215-220頁）を参照。

S. Ashina

16. Slavoj Žižek, *The Fragile Absolute - or, why is the christian legacy worth fighting for?*, Verso, 2000. (『脆弱なる絶対——キリスト教の遺産と資本主義に克服』青土社)、*The Puppet and the Dwarf. The Perverse Core of Christianity*, The MIT Press, 2003. (『操り人形と小人——キリスト教の倒錯的な核』青土社。)
- ・ラカン派マルクス主義者ジジェク：「戦略を逆転すること」「キリスト教とマルクス主義のあいだには直接的な系統関係があるのだ。そう、キリスト教とマルクス主義は新種の精神主義の襲撃に対して一致協力して戦うべきなのだ」「聖パウロ」(8)
17. ポストモダンという状況の共有、〈神〉理解において「愛」が鍵概念として機能。しかし、ジジェクの「脆弱なる絶対」は解釈学的系譜の「弱い思想」と同一ではない。
18. アガンベン《ホモ・サケル》シリーズ。
《ホモ・サケル》シリーズについては、邦訳書の訳者（上村忠男氏）による解説などを参照。このシリーズは、キリスト教思想と政治哲学との関連に関心のある者にとってきわめて刺激的である。特に、『王国と栄光』は本格的なキリスト教思想研究と評することができる。
- Giorgio Agamben, *Homo sacer. Il potere sovrano e la nuda vita*, Einaudi, 1995. (アガンベン『ホモ・サケル 主権権力と剥き出しの生』以文社、2003年。)
19. 「法は、法でないもの（たとえば自然状態としての純粋な暴力）を、法が例外状態において潜勢的な関連をもつものとして自らを維持することを可能にするものとして前提する。主権による例外化(L'eccezione sovrana)（自然と法権利とのあいだの不分明地帯としての）とは、法的参照を宙吊りにする(sospensione)という形で法的参照を前提することである」(Agamben, 1995, 25)、主権者とは、暴力と法権利のあいだが不分明になる点(il punto di indifferenza)であり、暴力が法権利へ、法権利が暴力へと移行する敷居(la soglia)である、ということである。」(ibid., 38)
20. 「法」に対する例外的なものという主権をめぐる問い。ジジェクでは、「超自我」という問題圏を巻き込みつつ、「法と侵犯との超自我的な弁証法」(Žižek, 2000, 142)の問題に接続。
- ・「愛を通じて法と侵犯との超自我的な〈悪循環〉から脱け出ること」(Ibid., 145)で
 - ・例外、過剰は法を宙吊りにするという論理。
21. ポストモダンについての理解（したがって、モダンについての）、特にニューエイジ的ポストモダンへの批判的視点の有無。
弱さ、愛という地点から、真理、隣人、そしてキリストについて「怪物的」(Monstrosity of Christ) へ、
22. 確かに、「欠如を抱えた、弱い存在だけが愛することができる。したがって、愛の究極的な神秘は、不完全のほうがある意味で〈完全よりも高い〉ということなのである。一方では、不完全で欠如を抱えた存在だけが愛するのである。われわれが愛するのは、すべてを知ら〈ない〉からである。他方では、たとえわれわれはすべてを知り得たとしても、愛は、不思議なことに、完成された知識よりもなお高いのである。おそらくキリスト教の功績は、愛する（不完全な）存在を究極的な完全さである神の位置にまで高めたことなのである」(ibid., 147)。しかし、このキリスト教は、「グローバルで均衡のとれた宇宙秩序のなかに、それとはまったく異質な原理を、すなわち異教的な宇宙論か

らみれば怪物的なゆがみ (monstrous distortion) 以外のに何ものでもない原理を導入した」 (Ibid., 120) とは言わねばならない。

(2) 絶対性の新しい理解を求めて

23. 「強い」と「弱い」は二項対立的か。

「強い」と「弱い」を包括するより十全な概念構築が必要なのではないだろうか。

24. 「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまもっています、イエスの命がこの体に現れるために。わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現るために。」 (第二コリント四章七―十一節)

25. 「強い」と「弱い」の二項対立を越えた、「弱いけれども強い」「弱いところでこそ強い」と言える神 (まさに「脆弱なる絶対」)。ポストモダンの多元的世界における〈神〉の可能性。

26. ジジェク：パウロ (レーニン主義者としてのパウロ) が指し示すのは、「アウトカーストの共同体 (a collective of outcasts)」 (ibid., 123) は「自らの声」を求め、自らの特別なアイデンティティ、つまり「自らの生き方」を主張する雑多なグループではなく、無制約的な普遍主義への関係にもとづいて形成された戦う共同体 (Žižek, 2003, 195)。

27. 自己完結的で特定の伝統や立場から空想された、強力な支配力で一切を体系的に統括する神ではなく、多様な伝統や立場からの影響を受けつつ、「脆弱なる絶対」「戦う普遍性」として機能する〈神〉。